



「まちづくり」のための地理学の役割 : 宝塚市西谷地区における実践から

白石, 太良

(Citation)

兵庫地理, 66:73-79

(Issue Date)

2021

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008346>



《雑感》 「まちづくり」のための地理学の役割 —宝塚市西谷地区の実践から—

白石 太良

はじめに

筆者は、宝塚市北部の西谷地区まちづくり協議会（以下、西谷まち協という）に協力し、10年余りの間、地域文化に焦点を当てて「まちづくり」活動に関わってきた。

この地区は、大都市大阪の中心部から西北方向へ約 35 km、高度経済成長期の近郊住宅地開発に乗り遅れてエアポケット状に田園風景を残す農村地域で、市街化した宝塚市南部に比べ少子高齢化と人口減少が著しく、将来像をいかに描くかが課題であった。これに対し地理学がどのように関われるのかは悩ましかったが、生活空間としての地域を探究する地理学徒の1人としての責務との思いのもと、住民が「地域らしさ」を理解してこそ地域のこれからが見えるとの思いでいくつかの活動を企画、実施してきたのである¹⁾。とはいえ、そこで行った諸事業は結果として地域の実態に接する機会となり、これらの活動に関連した地域課題のいくつかについて『兵庫地理』ほかにおいて報告している²⁾。

しかし、これらの活動が地区住民の願う将来像の実現にどれだけ寄与したのか、「まちづくり」への地理学からの貢献だったのかについて、十分な検証がなされたわけではない。もとよりそれは短期的に結論が得られるものではなく、何よりも実践する側の筆者が論じる事柄ではないであろう。とはいえ、地理学の立場で西谷まち協に協力してきた筆者には、総括とまでは言えないまでも、活動から見られた諸問題を整理しておくことが求められる。なぜなら、この実践は、研究成果を伝える社会教育の一環にとどまらず、地域と呼ばれる空間的広がりがあり様にまで踏み込んだ活動と考えるからである。

そこで、筆者が「まちづくり」という現実社会と関わるなかで直面したことがらからいくつかをとり

あげ、地理学が地域に果たす役割を考える出発点としたい。もっとも、本稿の各項はそれぞれ独立させて筆者の私見をまとめたものであるから、本稿全体としては雑感集といったものになっている。

I 地域振興への住民の願い

1) 地区の概要

西谷地区は宝塚市北部地域とも呼ばれ、面積は市域 (102 km²) の約三分の二を占めるものの、観光・住宅都市という宝塚のイメージとは異なって里山の広がる丘陵地帯である。この地は宝塚市街地から地区の中心(市のサービスセンターほか諸施設の所在地)まで約 15 km、北摂山地の小高い山々に囲まれた海拔 150m ほどの平坦部にはいまでも田園風景が色濃く残されている。市街化された宝塚市南部から遠くないにもかかわらず緑が残るのは、高度経済成長期に計画された大規模開発(宝塚新都市計画)がバブル崩壊とともに実現することがなかったことによる³⁾。このとき買収された山林は広大な県有地として残り、その活用方法は未だ定まっていない⁴⁾。

2) 農業振興と人口増加

この状況のなか、地区住民の多くが古くからの伝統文化を受け継ぐ兼業農家であることとも関わってこの地は宝塚市のヒンターランド的農業地域と位置づけられ、地域振興の方向は農業に重点が置かれている。これについては、一部に集落による集団営農や少数ではあるがや新規就農者の誕生もあり、宝塚ブランドによる産品開発⁵⁾、観光農業の推進⁶⁾などもみられる。もとより、農業従事者の高齢化に伴う耕作放棄地の増加、後継者不在による離農と空家増などに直面して将来への不安や危機感を覚える人々が多いけれども、農業こそが西谷の産業という方向

性は支持されているのである。

人口についてはどうか。明治町村制で誕生した旧西谷村とほぼ重なる本地区が宝塚市に合併したのは1955年、当時5,000人を超えた人口は現在では半減して2020年6月末現在2,377人となった。少子高齢化の進む現在は減少速度が速く、リーダー的住民の中にも「人口増加を図ることが最大の地域振興」との意見が多い。しかもここでいう人口は交流人口や関係人口ではなく定住人口で、空き家等を活用した住民の増加に期待を寄せる。地区内にはいくつかの小規模団地があって非農家が暮らしていることから、高度経済成長期と同様に都市住民の流入を願っていると言えなくもないが、農業に力点を置く地域振興策のなかで人々が願うのは、他の仕事をしながらであっても農業に従事する人口の増加のようである。しかも、先代から受け継いだ農地を守り続けてくれる人を望む意識が強いので、故郷を離れた子供たちを呼び戻そうという意見も多く聞かれ、新たな就農者の誘致には必ずしも積極的ではない。

3) 宝塚北サービスエリア

なお、地域振興に関連して、2018年春に完成した新名神高速道路宝塚北サービスエリアと付設されたスマートインターチェンジを挙げておく。この施設は地区の南部に位置するため完成前は農産物販売や観光流入を期待する声が大きく、これが地域振興をもたらせるとの意見も多数聞かれた。確かにこの利用者は多いが⁷⁾、物産販売に占める西谷産品の割合は高いとはいえず、スマートインターから流出する観光客は皆無に近いようで、住民が抱いた期待は実現していない。

II 「まちおこし」と「まちづくり」

1) 願いは「まちおこし」

以上のように、地区の将来について住民が願うのは農業振興とそれに伴う人口増であり、これに観光を加えて賑わいのあるまちの構築ということになる。もとより、「まちづくり」と呼ばれる活動には防災や高齢者対策など多岐の事業が含まれ、当地区でもそ

れらへの取り組みが行われている⁸⁾。しかし、最大の関心事は停滞する地区の立て直し、俗にいう「まちおこし」(村おこし、地域おこしなどの語も用いられる)にあり、停滞したこの地を社会的・経済的に活性化させる活動なのである。

このような住民の願いのもとで、地理学は各種地理情報の提供という社会教育的な役割は大きいけれども、住民が願う「まちおこし」策との具体的な関係はみえにくい。例えば、筆者は西谷地区で自然や歴史文化を活かした新たな観光ルートの開発を行ったけれども、それを活かして実際に観光客誘致の事業を実施したわけではない。農業振興についても、農業の現状や伝統作物などの情報提供はできるか新産品の開発とかその販売に関われるわけではなく、ましてや人口増加のためにIターンを促進する活動への参加などは、学問としての地理学の範疇を越えたものといえよう。

2) 地理学の役割「まちづくり」

そのなかで、生活空間としての地域の「らしさ」を探究する地理学が地域振興において果たすべき重要な役割は、様々な具体的施策の前提となることから、すなわち、「この地がその他地域とどのように差別化された魅力のあるところか」という情報の発信ではないか。なぜなら、それによって住民は自らの住まう地域への愛情と愛着が呼び起こされ、地域外の人々にはこの地ならではの素晴らしさを伝えることが出来るからである。流出した子供たちを呼び戻したいという住民の願いにしても、子弟に郷土愛があつてこそ伝わることであろう。

経済的活性化についても、行政域が宝塚市であるからといってそのネーミングで自己主張できるかという問題がある。地名の有効活用は良いとしても、風景や暮らしに市街地との違いがあるなかでは、農産物であれ観光客誘致であっても市域を単位とした振興策と同じではない。ここでも宝塚市合併以来見えにくくなった「西谷らしさ」を確認することの重要性が浮かび上がり⁹⁾、それは何なのかをとらえようとする地理学的な視点が求められよう。

もっとも、「らしさ」は地域の特徴を総体としてとらえる抽象的な概念であり¹⁰⁾、それに関わる地域振興の表現としては、停滞した経済活動を活性化させるという意味合いが強い「まちおこし」の語とはなじみにくい。そのため、地理学が地域振興に関わるのはこれからの地域の全体像についてであることからいって、「まちづくり」の語のほうが適切ではなかろうか。そこで筆者は、「まち」を生活空間としての地域的広がり、「づくり」を時代の合ったものに創るととらえ、社会の変化により見失われた地域の魅力や誇りを再構築するための活動を「まちづくり」と呼ぶことにしたのである¹¹⁾。

Ⅲ 住民意識への貢献

1) 意識変革の重要性

このような地域の全体像に接近しようという地理学からの活動は、住民意識の変革を目指すという意味があることから一種の社会運動と見ることもできる。社会運動としての「まちづくり」を卑近な表現でいえば、人びとがここに住んで良かった、あるいは関係を持てて良かったと思えるまちにするということであろう。

したがってその活動では、「わがまち」が素晴らしいところとの思いを人々が抱けるようにすることが求められる。それは地域間の違いが見えにくくなった現代において、この地が他の地域と区別された「らしさ」のあるところであるとの誇りと喜びを持てるようにする活動といってもよい。

このようないわば人々の意識改革を進めるには、「らしさ」の原点である自然環境や歴史文化、生活環境、産業活動などに関する住民らの理解が重要となり、そこに研究者側からの貢献が求められる。そこで筆者は、「まちづくり」の前提としての社会教育の重要性に注目して、いくつかの学びの機会を提供してきた¹²⁾。そのうちの1例として2015年に実施した「西谷検定」を取り上げ、「らしさ」の学びにおける課題を考えてみたい。

2) 西谷検定

「西谷検定」は出題範囲を限定した「ローカル版ご当地検定」で、参加者は54名と少数ではあったが、事業報告書のほかに住民の地域への理解度と問題点に関する小論をまとめている¹³⁾。そのなかから、住民の知識の特徴を簡単に再掲しておこう。

- ① 歴史的事実を知らなくとも暮らしに影響しないから歴史・民俗分野の正答率は低い。
- ② 同じ西谷地区でも自らの住まう集落以外のことはよく知らない。
- ③ 自らの体験を経ずにほかから教えられた知識は正確さを欠く。
- ④ 非日常的な地域文化についての知識は十分ではない。
- ⑤ 地域特性を主観的・感覚的に判断しがちで、一般化・抽象化してとらえにくい。

上記では分析の過程を省いて結論のみを列挙しているが、5つの特徴に共通するのは「住民は意外と足元の地域の地理や歴史を知らない」ということであつた。そのため多くの住民は、小学校の郷土学習などで学んだことがらを忘れるにつれ地域の将来像も直近の経験による知識にのみ頼ることになり、地域文化が「らしさ」のある地域の原点ということに思い至らなくなる可能性が高いのではないかと。

したがって、人びとがこの地に暮らす誇りと喜びを抱ける「まちづくり」には、地域の歴史や文化、地理などに関する学習機会の提供が継続的に行われる必要がある。この場合、その機会の提供を誰がどのように担うのかが問題となるが、地域という空間的広がり扱う地理学としても、社会貢献の一つとしてこれに協力することができよう。

3) 学習機会の提供

そこで筆者は、「西谷いきいき塾」と名付けた地域文化に関わる一連の講演会をコーディネートしたほか¹⁴⁾、西谷まち協文化研修部会の広報紙「西谷文化通信」(月刊・各戸配布)に地域の地理や歴史の記事を連載している¹⁵⁾。その他、先に挙げたいくつかの活動もねらいは同じである¹⁶⁾。

これらの活動は、「まちづくり」にとって重要な

「らしさ」の基礎部分といえる地域の地理や歴史を住民が再発見する機会の提供というねらいのもと、客観的なまなざしでそれを行えるよう第三者の立場から協力したものである¹⁷⁾。もっとも、この活動は地理や歴史に対する個人的関心と関係するだけでなく、日々の暮らしの向上に目を向けねばならない立場の人や団体からは見過ごされやすい¹⁸⁾。そのため、地域の地理や歴史の学びという実践活動に社会教育としての役割はあったとしても、「まちづくり」という現実的な活動としてどのような成果をもたらせたのかの判断は難しい。とはいえ、「らしさ」があってこそ自慢の地域となれるとすれば、住民のひとり一人が自分の価値観に照らし合わせながらではあるが、地域の誇りを発見する機会になったと考えてよいのではないか。

IV 文化資源を巡る課題

1) 在野の国学者と教育風土

地理や歴史からの「まちづくり」については、地域に残される文化資源を住民がどのようにとらえるかという問題がある。伝統的食文化とか著名な催事などの年中行事、あるいは国や県等により指定された文化財などは地域の誇りとして意識されるが、地域のなかに埋もれながらも「らしさ」を教えてくれる文化財も少なくない。

これに関して、西谷地区出身で各地を遍歴して国学を極めたのち故郷で門人を育て、明治末期に地域住民へ和歌などを指導した岡田惟平¹⁹⁾がこの地に残した墨蹟などを展示、当地の教育風土²⁰⁾を知る機会を模索したことがある。この展示は実現できなかったが、その背景に地域にある文化財への住民の考え方とか、第三者による社会貢献の限界などが見て取れた。これが地理学と関わるのかという疑問はあるが、「まちづくり」における地域文化のとらえ方を探るために、その問題点を整理しておく。

2) 共有財としての文化財

惟平の墨蹟の展示により教育風土にみる「らしさ」を住民に感じてもらおうとしたのは、それが指

定文化財ではないが他地域と差別化されるこの地ならではの文化財と考えたからである。その背景には、惟平が終生を在野の国学者として過ごして²¹⁾各地に墨書などを残しながら昭和10年の大本事件の際に大本教との関係から遺品の多くが破棄されたなかにあつて²²⁾、故郷の西谷地区では門人宅などにはそれが多く残されていたためである。

襖、屏風、掛軸、横額などとして残る惟平の墨書（自作の和歌が多い）は、床の間に飾られるものから物置の片隅に置かれるものまでさまざまである。所有者によれば、これは、墨書に資産価値を見出し、そのものでもその文化的価値を理解した上のことでもなく²³⁾、「先代から受け継いだ家宝のような大切なもの」との意識で残されており、したがって所有者家族以外にそれを知る住民は限られるという。しかし、惟平により育まれた明治末期からの教育風土を優れた地域文化ととらえれば、遺品の所有者は個人ではあるが、文化的には地域住民みんなのもの、すなわち共有される文化財といえることができる。

3) 社会貢献の壁

このなかで筆者は、惟平が地域にもたらせた民間教育の意義については紹介してきたものの²⁴⁾、墨書などの展示は前述の通り実現できなかった。その時に問題となったのは、遺品類の所有者が公開に躊躇しただけでなく、大半が私物のため第三者が関わるものではないとの意見が西谷まち協にあつたことによっている。

すなわち、文化財といえども私有財で、しかも公的に指定されていない文化財を「文化的にはみんなの共有財（知的な意味でのコモンズ²⁵⁾）」であるという意識の構築に向けた活動は、私的財産権という壁を越えられなかったのである。

この事例は、地域文化から「らしさ」に迫る社会貢献には現実社会との対応という難しさのあることを教えてくれる。「まちづくり」のなかで文化的に意味あるものを地理学がどの様に取り上げるかとも関係するが、文化資源に対する住民意識の構築という活動では、その実践の過程で研究者側の貢献の限

界ともいえる場面に出会うことになる。

V 「まちづくり」のなかの地理学

1) 実践活動のねらい

近郊農村の「まちづくり」における地理学の立場からの社会貢献では、大都市から近いのに「田舎らしさ」があるといったことを活かす方法について考える場合が多い。もっともこの言い方は抽象的だから、自然緩急とか農村景観など、さらには珍しい動植物、特色ある農産物、伝統的な年中行事や食べ物、時には人付き合いといったことをこの地ならではの「らしさ」の表れととらえ、それらを「まちおこし」にどう活かすかといった貢献が多い。

しかし、ここで述べようとしたのは、このような「まちおこし」の方法についてではなく、その前提となる「まちづくり」への住民意識の構築に向けた活動の実態、またその活動を進めるにあたっての課題といった事柄であった。このような地域の将来像にも関わる事例のような活動は、一種の社会教育だからそれを担うのは公的機関ではないかとの批判も受けながら、地域について学ぶ地理学徒の責務として実践してきたのである。

2) 地域文化からの社会貢献

地理や歴史、民俗などの地域文化は、その地ならではの魅力を醸し出す一種の社会基盤（現代的な用語でいえばソフト面の社会インフラ）といってもよく、それなくしては「らしさ」のある地域の将来像が描けない。したがって、誰もが知るような著名な文化的資源のないごく一般的な地域では、何が地域として誇る文化なのかを見出し、その誇りの意識を住民が共有できるようにすることが「まちづくり」にとって重要になると思われる。

一般に文化諸科学では、研究成果を世に問うこと自体が社会貢献であり、それを社会へ還元する活動は教育分野の役割とみる傾向がある。しかしながら、学術研究、なかでも地理学はその研究素材が地域社会のなかにあることを思えば、具体的な地域活動との関わりをもってこそ、研究が完結すると言え

なくもない。文化そのものが「まちづくり」とどのように結びつくのかという本質論とも関係するけれども、地理学は地域の地理情報を人々に提供するだけでなく、地域の「らしさ」を住民が意識するための活動に関わって現実社会との結びつきを深めることも大切な社会貢献といえる。

3) 地理学の役割

地理学からの社会貢献は、その研究成果を社会教育や学校教育などを通して社会に還元する形で行われることが多く、「まちづくり」に関しても、そこにいくつかの提言を含めるという特徴はあるものの同様である。これに対し、具体的な実践を行って地域に貢献しようという活動は、管見の限りではあるが、必ずしも多くないのではないか²⁶⁾。

しかしながら、繰り返し述べてきたように各地の暮らしの画一化が進み、地域間の差異が薄れつつある現代にあっては、その地ならではの「らしさ」を見出し、それを住民が誇りに思えるようにするための貢献に目を向ける必要があるのではないか。もとより、その活動を誰が担うのかに關しての限界があるけれども、地理学が「地域」と呼ぶ空間的広がり of 構成要素を総合して「地域性＝地域らしさ」を探る学問分野であるが故に、地理学徒こそがこれに関わることが望まれていると言える。

「まちづくり」への貢献において地理学が果たす役割は、地域を活性化させるために個々の地理的事実を活かす方法を示すにとどまらず、地域の自然・歴史・暮らしを踏まえてどのような将来像が望まれるのかという住民意識の構築にこそあると考える。そのための社会貢献として必要なのは、まずは住民が地域に関する正確な知識を持つ機会の提供であり、それをもとに郷土愛の原点とでも言うべき地域の誇りを住民が見いだせるようにすることであろう。

あとがき

筆者が住まいする宝塚市北部地区は、阪神大都市圏の中にありながら高度経済成長期の住宅団地開発の波に飲み込まれることなく、田園景観を残すと

にも多くの人々は兼業農家の暮らしをしでいる。しかし、少子高齢化と人口減少が進むなかで、地区の将来に向けた「まちづくり」をどのように進めるかが大きな課題であった。

居住歴約 40 年の新住民である筆者も、これに対して住民意識調査の報告書作成²⁷⁾などいくつかの協力を行い、1 人の地理学徒として地域社会への貢献を行ってきた。その中で考えさせられたのは、地理学が地域のこれからに向けて発信しなければならないのは何であろうかということであった。そこで筆

者は、「まちづくり」において地理学が研究の柱とする「地域性」をどのようにとらえればよいのかに焦点を当て、協力したいくつかの活動をもとにどのような貢献ができたのか、課題は何であったのかなどをまとめてみた。

もとより本稿は、各項目間の関連も定かでないから研究報告とまでは言えない雑感である。しかし、地域社会と地理学との関わり方に接近する出発点として、少なくとも問題提起にはなったのではないかと考える。

注

- 1) 地域文化に関する一連の講演会や文化関連の展示会、地区内を巡る見学ツアー、宝塚市合併 60 周年記念写真展、ローカルご当地検定、将来像に関わる住民意識調査などの実施、歴史文化スポット案内冊子や地理や歴史に焦点を当てた月報の刊行など。
- 2) 『兵庫地理』（兵庫地理学協会発行）に収録された研究ノートは次の通りである。
白石太良：教養型巡検ルートの開発と「まちづくり」—阪神北部の实践から—、兵庫地理第 60 号、67—73 頁、2015 年 3 月
白石太良：ローカルなご当地検定にみる住民の地域意識—宝塚市北部における“西谷検定”の事例から—、兵庫地理第 61 号、41—49 頁、2016 年 3 月
白石太良：近郊農村のこれからへ向けた住民の願い—宝塚市北部における“住民意識調査”から—、兵庫地理第 62 号、95—103 頁、2017 年 3 月
- 3) 兵庫県による「宝塚新都市計画」のなかで住宅団地や研究施設、産業施設などが計画されたが高度経済成長の終えんとともに休止され、買収された土地が県有林として残された。今も「この計画が実現しておれば」と嘆く住民も多く、「まちづくり」のあり方についての意見の相違を生み出している。
- 4) 一部は県立西谷の森公園などに利用されるほか、宝塚市でも自然体験型の観光利用に期待を寄せる。住民による「まちづくり」計画では健康・福祉施設の基地の設置を提言したが、実現の見通しはない。
- 5) 宝塚歌劇によって醸し出された清楚、モダン、洋風などがないまぜとなった宝塚という地名のイメージは、西谷地区が宝塚市域であることから農産品にブランド力を与えている。
- 6) 西谷地区の観光農業には、ダリア園や牡丹園のような見学型農業のほか、作付け・収穫といった体験型農業、貸農園などがある。
- 7) 朝日新聞 2018 年 9 月 21 日兵庫県内版によれば、2018 年度における県内の観光関連施設利用者数の第 1 位は甲子園球場の 439 万人、第 2 位がこのサービスエリアの 311 万人であったという。
- 8) 西谷まち協が直接的に関わる活動としては、景観

の整備、公共交通維持への活動、高齢者の移送サービスなど生活環境の改善に向けたものが多い。

9) 地域の独自性を主張するとの意見は住民すべてが共有しているわけではなく、多数の住民は無関心層であり、経済的活性化を願う人びとも宝塚の高い知名度に便乗することに期待を寄せる場合が多い。

10) 「らしさ」という語は分かりにくく、2015 年に実施した「住民意識調査」でも、自然の素晴らしさや人間関係の良さを「西谷らしさ」とする意見がある一方で、「らしさ」はないとする意見もみられた。地域振興に関しては、「西谷らしさ」ではなく宝塚市として考えようとの回答もあった。

11) この考え方では、「まちおこし」は「まちづくり」の結果であって目的ではないとなる。

12) 前掲 1)。ほかに昭和前期の暮らし展なども企画したが、コロナ禍などが影響して実施できていない。

13) 前掲 2) 兵庫地理第 61 号、2016 年。なお、ご当地検定は 2003 年に始まった地域活性化のための手段であるが、住民にとっては社会変化のなかで見失いがちな地域文化を思い起こさせる機会になるという側面を持っている。

14) 講演タイトルは「地名に導かれながら西谷の歴史を考える」、「伝統を活かすまちづくり—山の宝塚と平野の宝塚—」、「北摂の里山に息づく文化」、「多田銀山と西谷」ほか。

15) 広報誌への連載は、社会教育のねらいからも文化情報が数多くの人びとの目に留まりやすい。

16) 前掲 1)。

17) 第三者の協力は講演会の開催や研修機会の提供などによってなされるが、それを具体的な「まちづくり」活動のなかで実施するのは、管見の限りでは多いといえない。

18) 「日常の暮らしに目を向けなければならない立場」とは、現在の社会的・経済的な環境改善のために活動を行う立場のこと。行政をはじめとする公的機関や地域の各種団体、自治会などである。

19) 岡田惟平のひ孫岡田完司氏の私家本『あるがままに生きた伝説の歌人岡田惟平』（2008 年刊）によれ

ば、惟平（1821～1909）は師を求めて京・大坂などへ往来しながら 40 歳前後に国学・儒学・書道の奥義を極めたという。

- ²⁰⁾ 西谷の門人たちにより 1912 年に建立された顕彰碑には、発起人などに当地の名士 35 名の氏名が刻字されている。また、郷土史家光国光氏の随想「文人岡田惟平」（『花と緑のふる里に刻んだいぶし銀の年輪』兵庫県宝塚農業改良普及所刊、1984）に次の記述がある。「私は昭和 6 年に西谷小学校に赴任した。天長節など四大節には〇〇という 88 歳のひげのお爺さんが来賓として出席され、短冊に歌を書き、朗読してくださった。ひげのお爺さんは岡田惟平さんのお弟子さんと聞かされたものである。（中略）惟平の遺風が今も残っているのには驚いた。」
- ²¹⁾ 惟平は、北は若狭、南は吉野まで放浪の旅を続けて行く先々で門人を指導し書を残したが、宮内省御歌所の寄人に推薦された際もこれを辞退して、終生在野の国学者であり続けたようである。
- ²²⁾ 若いころの大本教の教祖出口王仁三郎を指導し、教団の祭事として重要な歌垣や歌祭りなどを教えたという（『大本七十年史上巻』（宗教法人大本刊、1964 年）による）。国家権力による一種の宗教弾圧とされる大本事件は 1921 年・1935 年の 2 回起きているが、惟平の資料類の多くが失われたのは第 2 次事件の時である。
- ²³⁾ 筆者の聞き取り調査に同行した某博物館の学芸員（書道が専門の研究者だが、公的な鑑定ではないので氏名を記さない）も墨書の素晴らしさを認めた。
- ²⁴⁾ 冊子や月報紙への掲載とその各戸配布をするとともに、住民を対象に勉強会などを行ってきた。
- ²⁵⁾ コモンズは「共有」の意で、かつての村落共同体が自治的に管理してきた入会地や共有林等の制度の意味で用いられる。現代社会では前近代的な制度として否定されたが、近年は自然保護や資源保全の観点から改めて注目されている。
- ²⁶⁾ 地域文化によるものではないが、近年の外国人の流入による地域社会の変化に対応する「まちづくり」に関わる高校生の実践活動の報告がある。（兵庫県立柏原高等学校インターアクトクラブ 2 年・3 年生、指導久保哲成ほか 2 名、「丹波市在住ニューカマー外国人の日本人社会への親近感・信頼感を高める活動と多言語紙芝居による防災教育の推進」、兵庫地理第 62 号、127－132 頁、2017 年 3 月など）
- ²⁷⁾ これからの西谷を考える会編集・発行、『宝塚市西谷のこれからのに向けて—平成 27 年度住民意識調査まち協と西谷自治会連合会によって組織され、筆者はその座長を務めるとともに、調査項目及び報告書の素案作成を行った。